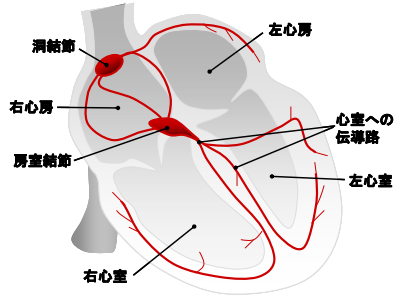


心電図所見の見方

- A 異常所見はありませんが、症状がある時は受診が必要です。**
- B 記載の所見を認めます。症状がある時は受診が必要です。**
- C 記載の所見を認めます。面接、精密検査、定期的なチェックを要します。**

A, B 判定は、現在、就学・就業に支障はないと考えられますが、胸痛、動悸などがある場合は、次回の健診を待たず、早めに医療機関を受診してください。主治医がいる方は、結果を報告してください。



心電図で何がわかるか？

心電図は心臓から出る微量の電気を、体表面から記録したものです。心筋の収縮と拡張や冠状動脈の硬化、心筋異常などが、その波形から推察されます。二次検査として行うホルター心電図は 24 時間連続記録をして、心臓の動きをみる検査です。心エコー検査は、超音波を使用して心臓を画像化し、基礎疾患（心室中隔欠損、心肥大など）の有無をチェックします。

心電図波形は何をみているのか？

心臓は、右心房の上部にある洞結節から規則正しく電気シグナルを出しています。電気シグナルは、刺激伝導系を通じて心臓全体に伝わって収縮、拡張の心拍動をくり返し、血液を送り出します。

刺激伝導系とは、洞結節～心房、房室結節～ヒス束～（左右）脚、～プルキンエ線維～心室を示し、この順で電気シグナルが伝わります。

心電図検査は、体の表面から、この電気シグナルを波形（P波、QRS波、T波）として記録しています。

【正常範囲内】

年齢からみて正常範囲にある波形を示します。

【洞性不整脈】

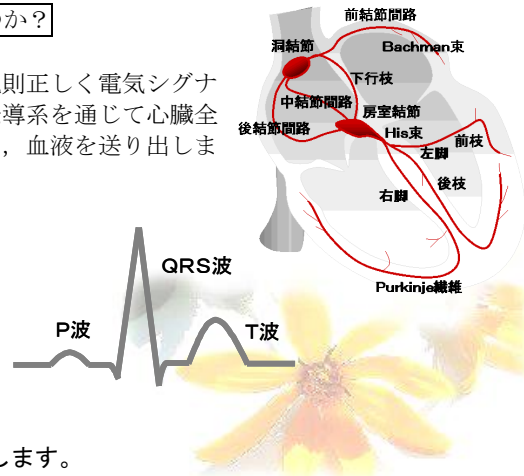
洞結節における刺激発生が不規則なことによる不整脈です。ほとんどが問題となるものではありません。

【洞性徐脈】

洞結節における刺激発生が遅いものをいいます。高齢者や運動選手に多くみられます。高度な徐脈（心拍数 45 以下）以外は特に問題にすることはありません。

【洞性頻脈】

洞結節における刺激発生が速いものをいいます。高度な頻脈（心拍数 130 以上）以外は、特に問題にすることはありません。



【異所性心房調律、房室接合部調律、ワンダリングペースメーカー】

これらは、心臓が収縮を起こす時の刺激発生場所がふつうの人（通常は洞結節）と違う場所にあったり、その場所がたえず移動することを表す心電図上の用語です。ふつうの方にはあまりみられないというだけで、別に病気と考えなくてもよいものです。

【上室性期外収縮、心室性期外収縮】

洞結節より早いタイミングで心臓の収縮が起こります。頻発や連発の見られる場合は精査が必要です。

【上室性頻拍、心房粗動、心房細動、心室調律】

いずれも精査の必要な不整脈です。医療機関を受診してください。

【補充収縮、房室解離】

洞結節から心室への刺激が遅れたり、欠如したりする場合に出現します。これら自体は問題となりません。

【人工ペースメーカー】

人工ペースメーカー様の波形がある状態を示します。治療を継続してください。

【洞不全（洞停止、洞房ブロック）、房室ブロック（1度、2度、完全）、右脚ブロック（不完全、完全）左脚ブロック、非特異的心室伝導障害】

伝導路のどこかで興奮伝導障害がみられることを示します。障害の程度や場所によって所見が異なり、問題とならないものから精査が必要なものまで様々です。

【P R 短縮（含 L G L 症候群）、WPW 症候群】

心房から心室への副伝導路が存在するため、心室が早期に興奮します。頻拍発作を伴う場合は精査が必要です。

【Q T 延長、ブルガダ症候群】

まれに致死的不整脈を合併することがあります。失神の既往や突然死の家族歴がある場合は精査が必要です。

【右房負荷、左房負荷、右室肥大、左室肥大】

心房、心室に負荷がかかっている可能性があります。精査が必要です。

【高電位差】

心臓の肥大や心臓の位置異常、また胸が薄い場合にもみられます。

【R波增高不良】

前方に向かう心臓の起電力が低いことを意味します。健康な人にもしばしばみられます。

【低電位差】

心臓の起電力が低いことを示します。病的要因のほか、心臓が相対的に小さい方や肥満の方にもみられます。

【Q波異常】

過去の心筋梗塞発症あるいは心筋障害、負荷が疑われます。精査が必要です。

【心筋虚血】

心筋に十分な酸素を送れなくなっている状態が疑われます。精査が必要です。

【非特異性 S T-T 変化】

心臓の肥大や虚血性心疾患にみられますが、健康な人にみられることもあります。

【右軸偏位、左軸偏位、時計方向回転、反時計方向回転、S1S2S3パターン】

心臓の電気軸が通常よりいずれかの方向に偏位しています。この所見だけでは、通常問題となりません。

【右胸心】

心臓が体の右側にある状態です。合併奇形がなければ、治療の必要はありません。